総評　2024年6月分　杉本真維子

「かかくくく／今日のみじん切りの音」しろとくろ（千葉県）
まさに切れ味のよい「か行」の音。物が喋る言語のよう。

「風船の傷きみと開きあうとき嬉々」吉冨　快斗（埼玉県）
畳み掛ける「き」の音の力。風船もきみも語り手も、傷さえも「嬉々」としている。

「おしゃれカフェ／悪口の味のするアイス」木下　香苗（滋賀県）
「おしゃれ」と「悪口」がうまく呼応している。どうしてだろう、と考えさせられた。どちらも自意識に関係するからだろうか。

「雨の朝の視界に麦茶溢れゆく」吉沢　美香（宮城県）
ぐっとあがる水位。麦茶はこのままの意味にもとれるが、雨と組み合わされると泥水もイメージされ、どこか不穏なものが流れこむ。意味のふるえが魅力。

「希望とは強姦魔の思想」詩央えみる（大阪府）
大胆な言い切り。これ、と感じた一点のためにほかをそぎ落とす。当然、欠落がうまれ、意味としては不十分になるが、それはそれでよいのかもしれない。そこから謎が生まれ、詩になっていくから。

「洗濯機の音鳴りやんでから／蓋開ける／ちゃんと話を聴くみたいに」碧碧（東京都）
人を思いやるように、洗濯機を思いやる。すると、モノと人のあいだにも、話す者と聞く者という関係性が成り立つのだ、と教えられた。

「とても駄目、駄目だと思う／紫陽花のおのおのの放心を眺めて」太代　祐一（神奈川県）
「紫陽花」の「放心」に畏敬を抱く。花の本質だと思う。よく見つけましたね。

「水筒は人の生き血をすすってる」彦凪至（東京都）
なんともユーモラス。水筒の妖怪でしょうか。肩掛けや首掛けなど、身体の一部に接している水筒は要注意ですね。

「長靴を代わりに履いてあげようか／ひと足先に紫陽花を見に」古林暁（神奈川県）
「あげようか」が相当いい。なぜかどきっとする。口語の魅力だろう。

「雨予報　降られず家に着いたとき／わたしに残るかみさまの部分」折原（神奈川県）
「部分」に注目した。かみさまは「部分」となりうる、というのは新しいかもしれない。

今回は全体的なレベルが高かったように思います。次回も投稿をお待ちしています。